

登校拒否・不登校を考える夏の全国合宿2010 in 福島

親シンポジウム「子どもの気持ちを受け止めて」

今年の夏の全国合宿は、福島の磐梯熱海温泉で開かれ、講演、シンポジウム、分科会など多彩なプログラムがありましたが、そのうち、全国から4人の方に登場いただいた親シンポジウムを紹介します。参加できなかった方も、じっくり読んでいただくことで、大切なことは何か、とても伝わってくるお話と思います。

シンポジスト	尾形ゆり子（福島・母親）	笹山洋子（東京・母親）
	大村美恵（愛知・母親）	野村俊幸（北海道・父親）
司会	下村小夜子（千葉休もう会 世話人）	

司会：千葉で親の会をやっている下村です。私も息子が小学校2年の頃から行かなくなって、地域で会を立ち上げて、今年で23年目になります。千葉市と佐倉市で親の会をやってきたんですけど、その活動の延長線上で「体調不良なままでも生きていけるような社会にしていきたい」ということで、さまざまなハンディや病気と共にありのまま働ける職場として、リユース食器の「風車」という職場を立ち上げました。親の会をしながら、本当にたくさんの人と支えあってやっていく中で、繋がりがあうということが、どれほど大事で必要なことであるかというのを、私自身、身をもって感じてきました。今日は、4人のシンポジストの方に、それぞれのお立場からの体験をお話しいただいて、いろんな知恵を分かち合えればいいなあと思います。

最初にご自身の自己紹介を兼ねて、お子さんがいつごろからどんなふうに不登校が始まって、その時親としてどんなふうを感じたり考えたりなさったのかというのをお聞かせいただければと思います。

尾形：福島の尾形と申します。私は18年前に離婚した3児のシングルマザーです。その時に親元に戻り、生活を始めるのに奮闘して、母子扶養手当を受けながら見つかった仕事によりやく慣れてきた頃、長男が中学2年で不登校いたしました。自分にとっては晴天の霹靂で、本当にお定まりに子どもは学校に行く義務があるんだ、親は行かせる義務があるんだと口走って追いつめました。今でこそ教育を保障する義務は国にあるということを知りましたが、当時母子家庭の不安もありまして、右往左往しました。公共の相談窓口とか医療機関とか医療系の親の会なども駆け巡りながら、“わらをもつかむ”思いだったんですけども、どうもしっくりこないで、最後に縁があったのが今の福島の「ほんとの空くらぶ・福島登校拒否を考える会」です。出会って、やっと本音で話し合える仲間が見つかり、ここはなんか違うということではっきりしました。ちょうど10年前の秋です。

その頃は、長男はもう痩せこけて、青白い顔をして、手も足も骨と皮で、髪も腰まで伸ばし放題で、ただもうひたすら取り付かれたように

ゲームをしていました。そのゲームのことを私にちょっと話すんですけども、薬を飲んでいなくてもボーッと幼稚園ぐらいの子どもがしゃべるような話しかけをされた覚えがあります。自分は仕事を続けざるを得なかったので、お昼に会社から電話をして、無事の確認をしていました。電話には出てくれていました。

そうやってなんとかやっていこうかなという方向が見えてきた頃に、今度は長女が学生結婚・出産ということがありまして、それも晴天の霹靂に近く、育児の手伝いなどで会に出られなくなってしまいました。不登校の息子も一緒に育児の大騒ぎに巻き込まれて、会の通信を読んだり、まだフォンテと名乗っていない頃の不登校新聞をとり、そのメーリングリストでみなさんが話していることを読んで、なんとか自分のバランスをとっていました。そして不安をしのいでいました。

娘の育児が一息ついて手が離れてきましたら、今度は末の二女が中2で不登校になりました。それは、けっこう驚きはしたんです。えっ、またか・・・と思いましたけど、ほどなく力まない関係になりました。というのは、子どもは突然なにか起こる、というのにもう慣れてしまったのもあるし、親の会に繋がりに続けている安心もあったからです。会に行きながら話しながら、その子に無理をさせないという方向で、わりに楽に、好きなことをのんびりやることを見守りながら過ごしてきました。定時制をやってみたいとか、好きな勉強がしてみたいとか、就職活動もあまりしないのに紹介されたものがあつたのでやってみるとか、それも頑張ったんだけどどうとう続かないとか、そのうちにお付き合いの相手がいってね、みたいないろんなことが次々と起こりましたが、そういう体験も心配でないと言ったら嘘になりますけど、一緒にできることはやり、

やってあげられないことは正直に話したりしながら、お互いにマイペースでやれてるかなあと思っています。

結婚した長女もいろいろあつたんですけども、発達障害やひきこもりの進路に関わる仕事についたんです。何度かいろいろ変わった後で、それもお互いに勉強になるというかコラボレーションするところも出てきて不思議だなあと思っています。長男は現在は27歳でひきこもって過ごしています。気が向くと家事を担ってくれることもあります。この頃ようやく不登校した当時のことを彼が普通のテンションで話してくれることがあって、淡々と見られるようになっていくなあとこの頃を感じています。

実は私も少しですが不登校の体験があるんです。両親からの期待というのがすごくあつたので、両親から追いつめられていたという恨みみたいなものがいつまでもあって、そういうものが息子とほぐれてきたことによって、自分が解放されてきて、両親に対してもなんだかほぐれてきたということがあります。長男とは対等にマイペースで要求を出し合って双方向の会話ができるようになったことが今一番うれしいと思っています。

司会：自分と両親との関係を再度考え直すようになったというのは、親の会でもよく出る話だなあと思いました。ありがとうございました。

笹山：ホームシューレ親会員の笹山洋子と申します。私の家族は20歳の長女と17歳で高校3年生の二女と15歳中学3年生の三女の三人娘、主人と私の両親の7人、あとウサギが1羽います。私の職業は看護師で、3交代で夜勤もあって病院に泊まることもあります。不登校体験の方は、現在15歳の三女が小学校1年の時からです。入

学当初から行き渋りとかがあっただけでなかなか教室に入れないこともあったんですけど、本人は教室に入ってしまうと元気に過ごしていたので、そんなものかなというふうには感じていました。ところが1年生の3学期のある朝、玄関を出た彼女がその辺にいて、泣いているのに気づいて、おばあちゃんにも「行ってないよあの子」と言われたんです。その日に何があったのか、なんで行けなかったのか、今まで行き渋っていたのははっきりした原因はわからないんです。この日以降、私か主人か、その頃小学校4年だった二女が付き添って、泣きながら登校していました。無理やりに引っ張って連れて行ったこともあります。そのうちに登校しても教室にまったく入れなくなって保健室で過ごすことが多くなりました。それが1年の終わりで、2年生に進級したら、今度は教室に入るどころか他の子の姿を見ただけで体が固まっちゃってまったく動けなくなってきました。

その頃の私は、一度休ませてしまうと娘自身が行きにくくなるのではないかという思いがずっとあって、その怖さから学校に行かせることに本当に必死でした。みなさんもきっと経験があると思いますが、一緒に教室で授業を受ける、一緒に給食を食べる、遠足にも休みを取って行く。夏のプールにも一緒に参加していました。

そんなこんなで、3年生になり、夜勤明けで連れて行ったりしたこともあったので、私が心身ともに疲れちゃって、これだけやったんだからもういいよ、もう学校は合わないんだからいいんじゃない、と、私の方が先に思ったんです。同時に娘に対して、もう学校に行こうが行くまいがこの子は私の子であることには変わりはないと思うようになりました。それでも、学校は「連れて来てくれ」と言うし、娘自身は「学校へ行きたいの？ 行きたくないの？」と言うと、

「行きたい」と言うんです。学校そのものが好きだったわけではなくて、他の子が行っているのにどうして自分には行けないんだ、他の子と同じように行けるようになりたい、という思いがあったのだと思います。

4年生になると娘は相談室で過ごすようになりましたが、相談室は扉を閉じた狭い部屋で、そんな所で過ごすよりも、もっと娘が生き生きと過ごせる場所があるのではと、フリースクールを検索して、東京シューレを知りました。説明会に娘も連れて行ったんですが、おもしろそうと言っていたわりには、まったく行かなかったもので、じゃあ、お母さんはいろんな情報がほしいから、お母さんだけ親会員になっていい？と聞いたら、いいよって言われて、2005年からホームシューレの親会員となっています。

ホームシューレは全国に会員さんがいるので、サイバーという会員専用のウェブサイトとか月1回のメッセージという会員誌を見たりしていました。1年ぐらいいは読むだけだったんですけど、徐々に自分の考えていることを聞いてもらいたいなあとあって、メッセージに最初の投稿をして、それをきっかけにサイバーにも書き込むようになりました。サイバー上で返事をもらったりとか、他の会員の方と交流するようになると、今度は会って話がしたくなかったです。その頃、何回かサロンというのが開催されていたんですが、仕事の関係もあってなかなか参加できませんでした。うちはキャンプが好きなので、アウトドアサロンなら企画できるんじゃないかと考えて、一回もサロンに参加していないにも関わらず、主催する側になって、スタッフの方に協力を得て、2007年の6月に都内郊外の公園でアウトドアサロンを開催しました。以降、大きい子を持つ親の集まりを開催したり、他の方が開催するサロンにも参加して、私自身楽し

く交流させてもらっています。

三女は、結局小学校は相談室登校のまま卒業して、中学はとりあえず受験をして、中高一貫の女子中学校に入学したんですけど、結局はすぐつらくて、泣きながら、でも行けば頑張ってしまう。「どこか学校で安心できる場所はないの」と聞いたら、「トイレが一番安心できる」と言われて、もうやめようよと。でも、私からやめようと言っちゃいけないんだよなと思いつつながら、泣きながら通っている子を見るのは、すぐつらかったです。結局は本人から休むと言い始めて、中学1年の6月末で退学して、籍は学区内の公立中学にありますが、1日も登校はしていません。本人は高校の卒業資格はほしいと言って、今は昼夜間定時制か通信制かねえと言って、どこか合うところがないか検討中です。

もう一人、長女については、小中と完璧に学校へ行っていて、不登校ではありませんでした。でも、その完ぺき主義ですごく自分を追い込んで、中学校2年生ごろからは、勉強に対しての不安感が強くなって、やってもやっても不安で、ずうっと机にかじりついているような子でした。不登校になれないし、保健室にも逃げることもできない、熱がでてでも学校を休みたくないという子でした。都立の高校は推薦で合格したんですけど、我慢の限界だったのか、結局1年で中退して、中退後はひきこもってました。話しかけても、なにしても、ずっと泣いていました。

ところが1年半ぐらいしたら突然「お母さん、花屋でのバイトを決めてきた」と言って、アルバイトを始めました。学校はもうこりごりだ、行きたくないと言って、高卒認定のみを取得して、現在は人を癒す職業につきたいと、マッサージやアロマの学校に行っていて、去年から一人暮らしをして、駅にあるクイックマッサージのお

店でアルバイトをしています。

三女の経験があったので、長女には「学校に行かなくてもいい」と言っていたんですけど、本人自身がかたくなに「行かなくてはいけない」と思っていたんですね。首に縄をつけて学校に連れて行くことはできないんですけど、逆に家に縛っておくこともできないんですね。行くと言うものは行かせるしかなくて、その頃中央線はすぐく飛び込みが多い線なんですけど、それを使って学校に行っていたので、私は本当に不安で不安で、仕事場にいつ電話があるかもしれないとすごく不安でした。本人がやっと学校を休み始めた時、本当にほっとしました。

二女は普通に学校に行っている子ですが、けっこうナイーブなところがあって、部活も嫌だけどやめられない、といつもお腹を壊してしまうんですね。学校休んでもいいよと言うと、長女は休めないんですけど、二女は「じゃあ今日は休む」と休める子ですね。ちょっと休みをとりながら、だから学校に行けるタイプの子なのかなあと思っています。そんな3人の娘です。

司会：学校にこだわっている状態も受け入れながら、学校に行こうと行くまいと自分の子どもだというのは、私も自分にそう言い聞かせて頑張ろうと思っていた時のことを思い出しました。

大村：愛知県豊田市から来ました大村美恵と申します。私は男の子が2人おります。下の子が小学校2年生から、上の子が中学校1年生から不登校をしました。二男は、最初にお腹が痛いと言って、あっそうなのじゃあ休んだらと言って、次の日は行ったんですけど、またその次の日には、足が痛いと言って、あれっ？ちょっとおかしいなと思ったんですね。初めはびっくりしたんですけど、たまたま1年ぐらい前に図書

館で『不登校を生きる』という本を借りたんです。それは、この全国合宿の第2回目の記録集だったんです。奥地さんの話とかを読んで、誰にでも起こりうる不登校と書いてあって、ああ不登校になると、体が悪くなくても熱がでるんだなあと思っていたら、ついに家の子もそうなったかということで、私自身は比較的すんなりと受け入れることができました。担任の先生とは、何度も話しに行きましたけれども、なかなか理解してもらえず、苦勞しました。夫を連れて行ったら、ようやくちょっとなんとかなったかなという感じです。

長男の場合は、本人は自活するんだ、絶対中学校までは行く、と言っていました。下の子が最初に行かなくなったのを見ていて、別にいつでも行かなくなってもいいよと私が言っていたのに、いや僕は行くんだと言っていたんです。けれども中学1年生の夏休みが終わった後、すごく悩んだみたいで、宿題をぜんぜんやってないんです。宿題ってすごい多いですよ。後から聞くと「死のうかと思った」と言っていました。自分から「僕もう行かないから」と言ったんで、あっそう、と学校へ伝えました。先生もすごいいい先生だったのに、「申し訳ないですねえ先生、うちの子行かないって言ってます」ということで。

司会：すんなりと受け入れたなんて、すごいなと思います。

野村：私は函館で「登校拒否と教育を考える親の会アカシャ会」と「道南ひきこもり家族交流会あさがお」という会の事務局をしております。長女は今36歳なんですけれど、中学2年で不登校になって、朝学校に行く段になると、玄関にうずくまったり、トイレに駆け込んだりして、

あそこ痛いここ痛いと訴えるわけです。学校を休ませますと、大変不思議なことに、昼頃には症状が消えて普通に過ごすんで、私ども夫婦はご多分にもれず、学校に行かそうとして、もう必死になってあの手この手を使います。先生にしょっちゅう家庭訪問に来てもらう、毎朝友達に迎えに来てもらう、最後は車に押し込んで学校に連れて行くななんてことまでやるんですが、そうやってですね、頑張れば頑張るほど、長女の具合は悪くなっていくんです。で、3年生になるとほとんど行くことができなくなります。これではどこの高校も入れないということで心配になってですね、もう1年残って頑張ろうと、そしてその次の年の受験に備えようという、まあ今から考えたらまことにばかげた判断をしてしまうわけです。これで長女を決定的に追いつめてしまって、もう学校へ行くどころの話じゃない。家から出られなくなる。部屋の中は荒れ放題で、昼夜すっかり逆転して生活のリズムはめちゃめちゃになっちゃってですね、当時はまだひきこもりという言葉はなかったんですけども、まさにひきこもり状態になります。

実はそういう我が家の体験について、5年前に『わが子が不登校で教えてくれたこと』という本を書きまして、昨年11月にこの改訂版を出しました(文芸社)。この本を書く時に、原稿を何度も娘たち2人と女房に見てもらったんですけど、その時に長女から「何度も自殺することを考えた」というふうに打ち明けられます。私はけっこう長女のことをわかったつもりになっていたんですけども、彼女が一番つらかった底の底の状態を知ったのは言ってみればこの本の時ですから、そんなに昔の話じゃないという、まことにこれはお恥ずかしい話なんです。

ともかく、ことここに及んで、女房がどうもこれは変だと、自分たちのやり方が間違ってい

たんじゃないかということに気がつき始めて、奥地さんのところに話を聞きに行ったり、いろいろ勉強して、無理に学校に戻そうとしたことで、長女をおかしくしちゃったということを知って、方針を変えるんです。でも、私はなかなか気持ちの切り替えができないんです。これは言い訳のようで大変恐縮なんですけれども、だいたい一般的には父親は「そんなことで世の中通用しない、もっと強くならなければだめだ」という気持ちから抜けられないんですよ。妻からもずいぶん説教されました。それから長女のいよいよつらそうな状態を目の前にしていろいろ考えてみたんです。

すると、長女を必死になって学校へ行かそう行かそうとしたのは、私はもちろん長女のためと思ってやっていたんですが、「このまま高校に行けなかったら困る」という、親の側の不安だということにだんだん気がついていきます。そこからですね、待てよと。「本当に高校へ行かなかったらこの子の人生はないのだろうか」というふうに気持ちが変わっていったんです。その時の解放感というんでしょうかね。孫悟空の頭を縛っている輪っかが、はずれるような感じ、その解放感というのは今でも本当にはっきり覚えておりまして、気持ちが本当に楽になっていったんです。

大変不思議なもので、自分の気持ちが楽になると、自然と子どもとやさしく接することができるようになっていって、そこからやっと長女とのコミュニケーションが回復していきます。だんだん長女も元気を取り戻して、結局は北海道立の通信制の高校に進みまして、その内にアルバイト先で知り合った青年とさっさと結婚しちゃいました。今は中学3年生の女の子と、小5と小2のわんぱく坊主の、3人の子育てで肝っ玉かあさんをやっております。

二女の時は、姉の時とはまったく逆の対応をしました。二女は今26歳になります。小学校4年の1学期が始まってまもなく不登校になるんですけれども、私はいっさい学校へ行くように無理強いはしませんでした。いわゆる義務教育9年間の後半6年間はほとんど学校に行かないという生活をして大きくなります。途中いろいろ紆余曲折はありましたけれども、なんとかだいたい元気で暮らせたかなというふうに思っているんです。その後18歳の時に、突然公務員になると言い出しまして、公務員試験の予備校に通いだし、無事採用試験に合格しまして、今北海道庁の職員として旭川で働いております。

この4月にこの二女も男の子を生んだんです。したがって、孫4人のじいさんでございまして、本当に「孫という名の宝物〜♪」というですね、無責任にかわいいんで、べとべとなんです。長女から、「じいちゃん甘い、私の時とはずいぶん違う」と厳しく教育的指導を受けておりまして、たしかに無理に車に押し込んでやったような親が、まことに態度が変わったものですから、あきれているようなんです。考えてみますとね、長女が小学4年生のあの時に、もし私が態度を変えないで学校に行くことを強制し続けていたら、あるいは二女が不登校になった時に、「お姉ちゃんが不登校なんだからせめてお前くらいまともに行ってよ」みたいな形でプレッシャーをかけていたならば、はたしてそういう宝物に巡り会うことができたんだろうかと今しみじみと感じております。

親にしかできないこと、 親だからできること

司会：親シンポジウムで歌を聞いたのは初めてだと思います。21回目にして初めての体験でし

た（会場笑）。

次の質問なんですけど、最近相談機関とか、いろんな施設が増えてきていて、そちらに子どもを預けたり、人に勧められたりということが増えてきているんですけど、ただ、親にしかできないこと、親だからできることもあるんじゃないかなというあたり、感じられたことがあればお聞かせいただきたいです。もう一つはみなさん親の会をなさったり会に繋がったりしてらっしゃるんですけども、親同士が繋がることの意味とか、繋がってらっしゃる理由、必要性について、お聞かせいただければと思います。

尾形：親としてできることというお話ですけども、親自身としてはそんなに画期的なことではないんですけども、最終的に思うのは、子どもの外側に積み重ねて行くものを求めているということをすっかりやめたつもりです。子どもからは、「そうでもないよ、時々欲を出しているんじゃない？」と言われるんですけども、自分としては子どもそのものと自分そのものが、命を与えられたものとして一緒に今を生きているね、ということが原点なんじゃないかなあとということしかないと思います。

たしかに外側に積み重ねる学歴とか資格とか職歴とかを社会はどんどん求めてきますし、それを積極的にやろうとしないと社会に受け入れられないぞ、としかかれてしまうかもしれませんが、そういうふうに生きて生き続けて、大きな話になると地球全体がゆがんできているみたいなのも、そうやって一生懸命に人類がまい進した結果なんじゃないかなあと思っていて、いやこころ辺で人としてどう生きるかということをゆっくり考えたって全然いいよという感じになっています。

今関わっている「ほんとの空くらぶ」という

親の会で、親同士が語り合う中でのことですが、親が孤立して追いつめられると、そのことが子どもをも追いつめてしまうかもしれないけれど、とにかく追いつめられて不安になるわけですよ。そこが解放されていく。「これがモデルケースで、あんなふうになったらいいね」というのはないんです。自分も語るし、人の話を聞けるようになるというのが一番大きいかな。人の話を聞けていくと、なんか知らないけど自分の中で何かが起こってほぐれていくんです。そうすると、子どもとの関係もほぐれる。自分も子どもも、少しずつ自己肯定感がきざしてくるというか、あれ、いつの間に私はこんなに強いのか？というか、これでいいんじゃない？という強さというか、上を求めないというか、開き直ってしまうというかですね。それから、先程代表の大岡が「んだね・かふえ」の看板をお見せしましたけれども、会の有志で小さな居場所を立ち上げました。何ができるかわからないんですけど、不登校やひきこもり当事者、それからその人たちを支えあう人たちの繋がりというんですか、そういう人たちがほっとする場をめざしています。こんなことできるといいねえといいながら、亀のような歩みでやっております。

司会：一緒に生きることが原点というのは、本当にそのとおりだなあと聞いていました。「んだね・かふえ」私も行って見たいなあと思っています。

笹山：ホームシューレの子どもたちは学校とかフリースクールには所属せず家庭をベースに過ごしています。中にはサロンに参加したり、専用のサイバーで交流している子もいるんですけど、ほとんどの子は大半を家で過ごしていて、それって大丈夫なの？ 社会性は身につくの？

とか批判されることが多いです。でも、親はやっぱり学校に行こうと思って傷ついた子どもを間近に見ていますし、子どもが家にいても怠けているのではないということを知っているといます。子ども自身も傷ついた心が癒されてエネルギーが充電されてくると、家にいるのはつまらないとか何かしたい、友達がほしい、と気持ちの外に向いて来るんだと思います。そういう子どもの気持ちを訴えやすいのは親だし、子どもの気持ちの変化を一番につかめるのが、つかんであげなくちゃいけないのが、側にいる親だと思っています。「見守る」と言うとなんかなにもしないというふうにとらえられることが多いように思うんですけど、見守るということは、何もしないで漫然と子どもを見ていることではないと思っています。何気ない日常の中で子どもに対して今何をしたいのかなとかセンサーを働かせて、ささいな変化をとらえて機会を逃さないで働きかけていくことが必要なんじゃないかなあとと思っています。これは親にとってしんどい鍛錬が必要で難しいことだと思いますけど、自戒もこめて、親としての感性をもう一度研ぎ澄ませて、子どもが何を求めているのかを考えていく必要があるという、それが親でなくてはできないことだと思っています。

親同士が繋がりあうことの意味については、子どもはだんだん元気にはなっていくんですけど、今日調子がいいかと思うと明日にはふさぎ込んでいたり、ちょっと前までニコニコしていると思ったら、今は不機嫌で話もしないということとはよくあると思います。親としては、子どもがつまんないと言いついたから、これはどう？あれはどう？と言ったのに、だいたい即却下されて、行くと言っていたのにすぐドタキャンされるということが多と思うんです。そういうことが繰り返されると、親も気持ちが沈ん

だり悩んだりすると思います。そういう時に、親同士が、うちもそうよ、そうそう、というふうな話ができたりすると、すごく力をもらえると思います。他の子どもそうなんだと知ると、他の子を通して客観的に見ることができるようになったりもするし、それが親同士繋がりあうことの意味じゃないかなあとと思います。親同士がそうやって元気になってくると、子どもからちょっと離れて、俯瞰して見れたりとか、エネルギーを与えられていくんじゃないかなと思います。

司会：親の感性というのは、その子どものSOSをキャッチするという意味で、とても大事なお話だったと思います。

大村：私は、二つのエピソードをお話したいと思います。長男のことですが、ちょうど大河内君のいじめ自殺事件が起こった時期でもありまして、愛知県に心の相談室というのができていて、どんなもんだろうと申し込んでみました。そうしたら、体重は何グラムで生まれたんですか？、母乳でしたか、ミルクでしたか、お母さん働いていましたか、何歳から保育園に行きましたか、ご兄弟はどうですかと、すごく細かく聞かれて、いちいちそれに答えていたんです。私は実は三人出産しているんです。長男と二男の間にもう一人男の子がいたんですが、残念ながら死産だったんです。そのことをカウンセラーの先生にお話ししたら、先生は、そのことが長男の心に重くのしかかっているのではないかと、僕が悪い子だったからその赤ちゃんが死んじゃったんじゃないかと。私はすごく単純なものですから、ああそうだったのかと思って、家に帰って子どもに聞いたんです。今日カウンセラーの先生はこう言ったけど、どう？

そうしたら、長男は、その人は僕に一回も会ってないでしょ、そんなことわかるわけないじゃんと言いました。あっ、そうかと、単純な私は、やっぱり子どもはすごいなあと思いました。親はもがきながら、あっちへ行ったりこっちへ行ったりしてやっているわけです。

もう一つのエピソードです。二男が小学校2年生で行かなくなって、別にいじめもなかったし学校が嫌いだとも言っていなかったけれども、なんか嫌なことでもあったのかなあと、先生に何か言いたいことある？と聞いたら、昔のマラソン大会のことを話したんです。マラソン大会は全員強制でやらせるんです。クラス対抗で、4クラスあって、担任の先生は学年主任だったんです。そのクラスは負けてしまい、先生の説教が始まるわけです。一番遅い子がいたんですよ。うちの子も運動苦手だから、遅いんですけど、うちの子よりもっと遅い子がいたんです。その子に対して、あんたがいたから、びりになったんじゃないのみたいなことで、怒ったそうなんです。それがすごく嫌だったと言ったんです。ああ、自分が怒られたんじゃないけども、目の前で他の子が怒られても、傷つくんだなあ。その先生きっとそういうことを思ってもみないだろうから、先生にそのことを言ったらどう？、先生は言わないと絶対気づかないから、言ってみたら？といたら、いやそれは言わなくていいと言ったんです。ボクが言ったくらいで、先生はわかってくれないだろうから、言わない方がいいよ、と言われたんです。

先生には、どうか私が責任を持ちますので、学校へ行かないと本人が言っていますので、そういうふうにさせていただきますと言ったら、先生は「小学校の低学年なんて、動物と同じですよ。お母さん学校に来てみてください」そういうふうな感じの方だったので、こりゃ駄目だと思っ

て、それからは戦うことをやめました。ひたすら、親の責任でやるから大丈夫ですということでした。

いろいろな相談機関に行ってみましたけれども、子どものことを一番よく知っているのは、親ですよ。親自身が自分を責めることなく、自分を見つめ直して、自分の人生を生きる。子どもの方だけを向くのではなくて、自分は何がやりたいのかなと考えて、自分の人生を生きることで、子どもの状態がよくなっていくというふうにしたんです。これは、親の会15年やってきて思ったことです。

司会：自分の人生を生きてほしいというのは、若者たちが大人に対して言いたいこととして、シンポジウムなんかでよく出る言葉ですね。

野村：私は、まず家庭が子どもにとって安心できる居場所になるということが出発点になるだろうと思っているんですね。もちろんフリースクールとかフリースペースのような子どもの居場所が大変大きな役割を果たしていることは間違いないと思います。それからたとえば市町村の教育委員会でやっている適応指導教室、これも玉石混淆なんですけれども、あまり学校復帰を強く押し出していないところも意外と活用できるのではないかなあとということで、私どもはそういった機関とも協力するように心がけています。年に一回ですけれど、函館市の教育委員会と意見交換の場をもったり、ある地域では不登校の親の会に適応指導教室の先生が会員として参加しているということもございます。行政との関係についてはお互いに役割とか立場の違いというものを認めて、尊重しながら、子どもの利益に繋がることについては協力し合うという姿勢で取り組んできました。

ただし、一番大切なのは、お子さんの気持ちだと思っんです。いろいろな機関や施設を利用するにしても、まずはお子さんにとって家庭が安心できる居場所になることが、私は出発だろうと思っております。そして、家庭が安心できる居場所になるためには、親御さんがわが子の不登校を受け止めてですね、学校に行かないという生き方があっていいんだと、腹をくくるといふことも必要だろうというふうに思っております。

ただ、誤解のないように申し上げますと、私は学校を否定するという意味で言っているわけではないのです。いろいろな事情が重なって、この子はともかく今、その学校が安心できる居場所になっていないんだということを、無条件で認めようということなんです。特に学校関係の皆さんにお願いしているのは、子どもが元気になることが一番であって、学校に戻るといふことは一つの結果であって、目的じゃないんだということ、関わってほしいということ、それともう一つ、学校に行かない代わりに、どこそこに行かせるというのは、場合によっては子どもを追いつめる結果になりかねないと思っております、もちろんお子さんのエネルギーが溜まってきて、何かやりたいという気持ちが湧き上がってきたら、いい結果を生むこともありますから、子どもさんの状況をよく見極めた上で、その場合も疲れたらいつでも家に戻ってきていいんだよということを送り出す。それを子どもさんにはっきり伝えるということが大事なんじゃないかなあというふうに思っております。これはもちろん家庭が全ての責任を追うという意味で申し上げているのではなくて、実際に学校に行くのが当たり前というのが一般社会の常識ですから、親とか家族だけでそういった気持ちにたどり着くのは難しいと思っんです。そ

こで親の会の役割が大きくなってくると思っんです。

私は社会福祉の支援活動にとっても親の会は大変有意義であるということに気がつきました。その辺のことも先程ご紹介した本の中で、わが家の体験と親の会の活動などをソーシャルワークの理論に基づいて説明しています。社会福祉活動の重要な一分野にグループワークという分野があります。中でも最近、当事者グループとか、自助グループが重視されております。こういう自助グループの役割は、5つほどあるかなと思っております。一つは、体験者の生の話を聞く。二つ目は、当事者自身が自分の悩みや体験を語ることで、自分の気持ちを整理して次のステップに進むことができるということ。三つ目は、当事者同士の語り合いを通して、ピアカウンセリングという役割を果たしていただくということ。四つ目は、たとえば学校との関係をどうしたらいいとか、社会資源や関係機関をどう活用していったらいいかということ、これを相談する、言ってみれば作戦会議のようなこともする場であること。五つ目は、不登校についての社会の理解を広めるための講演会とか研修会などを開催したり、課題によっては行政機関や学校などにいろいろ働きかけをするという点です。

わが家の体験を振り返ってみても、長女の時にこういった「アカシヤ会」のような会があったら、もっと早く私は長女の不登校を受け止めて、長女をあんなに苦しめないですんだんじゃないかなと思っっているわけです。二女の時に学校に行くのを強制しないですんだのは、「アカシヤ会」などに参加して、これでいいんだという自信を持つことができたこと、そして東京シューレなどから発信される不登校についての的確な情報を知ること、こういう活動を続けるこ

とができたんじゃないかなと、心から感謝しております。

今、思うこと、伝えたいこと

司会：なんといっても、まず家が居場所になるということが本当に基本だと思いますし、最後の、社会的な活動にも繋げていけるという点で、親の会というのはより広がった意味も持つというお話をお聞きしました。

最後になりますが、みなさんいろんな子どもさんの状態があったと思うのですが、そのような体験から不登校やひきこもりということについて、今どう考えていらっしゃるのか、そして現在渦中にいらっしゃる方に伝えたいこと、また社会全体に伝えたいメッセージがあればお願いしたいと思います。

尾形：不登校・ひきこもりは、当事者問題でもあります。同時に親としては、親問題なんだと思います。親が自分に問い忘れていたことを突きつけられる。つらいけれども、一つずつ縛っていたものを手放して、楽になっていく過程でもあると思います。行きつ戻りつが交錯して、決して望まれる夫婦像でも子ども像でも親像でもない、修羅もあり楽園でもあるオリジナルの家族が、もしかしたら血の繋がりでだけではくれない共同体が浮かび上がってくるのかもしれない。この発言は多少とも講演予定者の芹沢俊介さんの本に影響を受けているのかもしれない。新しい家族像とかそういうことで、ヒントを得た考え方なんです。縁あって生を受けた親子として、互いに出会えてよかったという時間が少しでも持てたらと思います。

社会全体へと申しますと、そうした良くも悪くもありのままの者たちである私たちが、背伸

びをしなくても社会に受け入れてもらえるように、できる範囲で働ける共同体、ちょうど下村さんの関わっていらっしゃる「ワーカーズコレクティブ風車」とか北海道にある「ベテルの家」の働きとか、ああいうありのままのことが会とコラボできる共同体というのが、私たちにはまだ可能性として残されているのではないかと考えています。よく政治家さんなどがおっしゃる「堂々とした納税者」を作っていくためにニートを支援するなんていうことがあります。そういう言葉で圧迫しないで、むしろ納税されている方も支えあうという社会を創出できたらなあというのがこれから老後の夢でございます。

笹山：不登校やひきこもりというとそれをひと括りにして世間はマイナスにとらえることが多いと思うんですけど、一人一人人生は違って、成長していく過程も違うんじゃないかと思えます。新聞でも、ずうっと何十年もひきこもっていた人が外にでるようになったと取り上げられたり、不登校だった人が社会にでて、その体験をいかして先生になっているとか、それはそれで素晴らしいことですが、出て行ったとかそういう成功体験ばかりをすごく取り上げていて、そのひきこもっていた時間がその人にとってとても大切な、それがあったから、出れたのかもしれないというのが、社会一般ではどうしても伝わらないというふうに、私は思っています。

不登校の解決は、子どもが学校へ行くことではないと思います。不登校を問題としてとらえて、親自身が子どもが学校へ行ってほしいと望んでいる時には、なかなか親自身苦しみから抜けられない。この子にはこの子の人生がある、学校に行く行かないに関わらず、この子は自分の子どもであることに変わりはないと思えた時、やっとなんか自分がすんと落ちた時に、苦し

みから抜け出せて、そこが解決といえば解決になるのかなあと。不登校の解決ってお子さんが変わることではなくて、親自身が変わっていくことだと思います。子どもを妊娠した時の気持ちを思い出さなくちゃいけないと思います。あなたは、お母さん、お父さんにとって、たった一人のかけがえのない子どもだからって。私は今、子どもにありがとう、生まれてきてくれて伝える義務があるんじゃないかなと思ってます。私は伝えていまして、子どもからは、お母さんがお母さんでよかったって言ってくれているので、うれしい言葉だなあと思っています。

司会：とっても素敵な言葉ですね。

大村：「学校」という、山田洋二監督の夜間中学の映画があります。その中に不登校の親子が出てくるんです。いかにも不登校という感じで、暗い感じの女の子で、下を向いていて髪の毛長くて、お母さんが横から口を出したりして、先生がどうして学校へ行かなくなったんですかと聞いても、女の子がうつむいて何も答えないので、お母さんが「ちゃんと先生に答えなさい」と言う場面があったんです。それからしばらくして、うちの子が不登校になって、定時制高校に見学に行きました。教頭先生と3人で話したんですけど、先生が二男にどこの中学校ですかと聞いたんです。うちの子は中学校なんて行ってないから、自分の中学校の名前を言えなかったんです。私が答えたら、「お母さんに聞いているんじゃないや」と言われて。

もう親はね、失敗します。失敗していいんですよ。不安だったら、不安になってもいい。親の会ではね、大丈夫ですよ、お母さん、心配しなくて大丈夫ですよって、アドバイスしてもやっぱり親って不安になるじゃないですか。不安

になっちゃいけないって言われたのに、不安になった自分はダメだと、また落ち込むから、別に不安になってもいいと思います。私が伝えたいのは、こういう親の会や今回の合宿などに参加して、悩んでいる人は自分だけではないということを知ってほしいなあとということです。

もう一つは、問題が起きた時、その問題は一体誰が困るのか、誰の問題なのかというのをちょっと考える訓練をしてほしいと思います。子どもが学校に行かない。困るのは、子どもなのか、親の世間体なのか。親自身がいろいろな本を読んだり、他の人の話を聞く中で、自分に起こったことを客観的にとらえなおしたり、一回や二回親の会に来ただけではなかなかわからないかも知れないですけど、空間とか時間が必要だと思います。今回「私、親シンポやるんだ」と次男に言って、渦中にいる人に伝えたいことって何？というふうに聞いたんですけど、「お母さんは自分の好きなことをやっていればいいよ、子どものほうばかり向いているんじゃないよ、自分の好きなことをやっていればいいよ」ということでした。

司会：この言葉も、とっても素敵な言葉だなあと思っています。

野村：6月に函館に若者サポートステーションが開設されまして、私も相談員として関わっているということから、今日は親の立場とソーシャルワーカーの立場から発言をさせていただきました。

最後に2点だけお話をさせていただきます。一つはですね、不登校について考えますと、あきらかに現在の教育システムの中で生じている問題です。ですから、これは教育改革の課題とリンクさせて考えないと、いわゆる不登校対策

というものは、結局は個人や家庭の問題に還元されていってしまって、これでは子どもの最善の利益は守ることはできないというふうに思います。

二つ目ですけれども、先程ソーシャルワークの考え方が役に立つと申し上げましたけれども、アメリカの社会福祉の臨床家のバイステックという方が打ち出した「ケースワークの原則」が非常に大きな役割を果たすと思っております。たとえば、クライアント一人一人の違いを大切にしてお互いに関わろうという原則とか、解決策を押し付けるのではなくて、クライアントが自己決定できるように支援していく、あるいは、まずクライアントをそのまま受け止める、いわゆる受容と言われている原則など、とっても大事なことがそこで言われております。私はそういったケースワークの原則のキーワードを「信じて待つことの大切さ」だと思っております。

先程、笹山さんが言われましたことに私も大きく同感でありまして、信じて待つというのは何もしないということじゃなくて、わが子をしっかり理解する、そして受け止めるという行動をすることだと思っているんです。不登校していようがいまいが、ひきこもっていようがいまいが、あなたは本当にかげがえのない大切な子どもなんだ、生きていくということが一番大切なんだというメッセージをしっかり繰り返し繰り返しお子さんに伝えていくということが必要なんだろうと思っています。

函館の高校の大先輩である北島三郎さんの『終着駅は始発駅』という歌に「函館止まりの連絡船は青森行きの船になる／希望を捨てるな、生きてる限り、どこからだって出なおせる／終着駅は始発駅〜♪」という歌詞があります。これ、私は不登校やひきこもりの若者への応援歌だと思っているんです。ひきこもりになって就

職もできないということになるとですね、本人も家族も人生の終着駅に来たような気持ちになっちゃうんですね。けども、これは不登校やひきこもりに限らず、子育てでも人生そのものでも、そういう気持ちになることが何度もあると思うんです。が、その終着駅で旅の疲れをすっかり癒してですね、また出発すればいいじゃないかと思うんです。終着駅を始発駅にできるためにですね、こういう各地の親の会やフリースクールやフリースペースが活動しておりますし、こういう全国の集いというものもあるんじゃないかなというふうに思っております。まさに「どこからだって出なおせる、終着駅は始発駅」ということで、私の発言を終わりたいと思います。

司会：聞いていて、一瞬もう懇親会が始まっていたかなあと感じてしまいました（会場笑）。

お一人お一人それぞれが、貴重なドラマがあって、すばらしいなあと感じて聞いていました。尾形さんの血の繋がらない共同体の話とか、笹山さんの子どもの存在のかけがえのなさの話とか、大村さんみたいに不安でもいいんだよねと言ってもらえたら、本当に安心するなあとという感じがしますし、それに野村さん、すごいいいのどで歌っていただいて、「終着駅は始発駅」というのがもう頭から離れないなあとと思います。

最初は苦しみながら、でもいろいろ考え人と繋がり、子どものありのままを受け入れていくというその過程の中で、すごい深い学びがあって、私たちも自分の人生を生きていくというふうに変っていくというドラマがあると思います。こんな素敵なお話を一緒に聞かせてもらって、この場を共有させていただいたことを本当に感謝したいと思います。ありがとうございました。（拍手）